



『家島町』をたずねて

家島町の歴史的環境

家島諸島は姫路市飾磨区から海上18kmを隔てた播磨灘の北西に浮かぶ大小40余の島々からなる。一般に家島40余島と呼ばれるが、島名をもっているのは27島2礁である。このうち家島・男鹿(たんが)島・坊勢(ぼうぜ)島・西島の四島が全体の面積の約90%を占める。古来、播磨灘の漁業で栄えてきたほか、畿内と北部九州を結ぶ海上交通の要地(避難港)としても重要な役割を果たしてきた。

家島諸島における最初の人類の足跡は旧石器時代(約3万年～1.3万年前)まで遡る。男鹿島、太(ふと)ん島、桂島ではナイフ形石器などが採集されている。

縄文時代の遺跡は、坊勢島と男鹿島で早期に属すると考えられる石鏃やスクレイパーが出土している。そして西島の東オドモ遺跡やマルトバ遺跡では前期末から後期後半の土器が出土している。

弥生時代になると男鹿島の大山神社遺跡(中期後半)をはじめ20ヶ所程度の遺跡が知られる。その多くは表面採集等により発見された遺跡である。

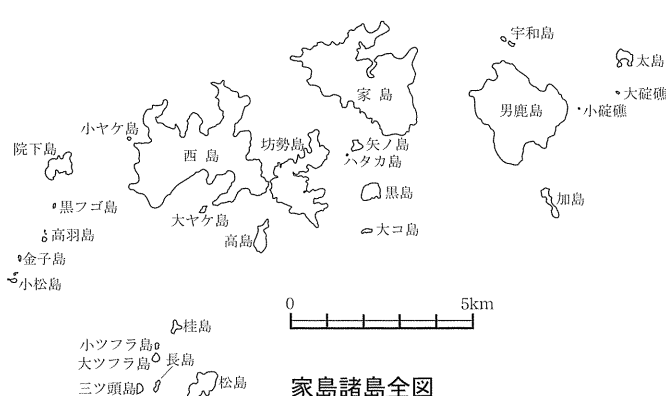
古墳時代の前・中期の遺跡は確認されていないが、後期になると家島、男鹿島、西島で古墳が築かれる。家島では、家形石棺を伴うチンカンドー古墳が所在し、男鹿島には、横穴式石室の菱のタイ古墳がある。また西島には、積石塚のマルトバ古墳群が所在する。

古代には『播磨国風土記』揖保郡に家嶋(伊刀嶋)がみえる。天平8年(736)の遣新羅使人らが家島に到着したときに詠んだ「家島は 名にこそありけれ 海原を 吾が恋ひ来つる 妹もあらなくに」など歌五首(『万葉集』巻15)をはじめ、後にも歌枕として多く詠まれている。

中近世は揖東郡に属した。治承4年(1180)3月、室泊(現たつの市御津町)に立寄った源通親は、筑紫へ向かう船は風により家島に停泊すると記している(「高倉院厳島御幸記」)。文安2年(1445)1月2日には家島船籍の船1艘がナマコを積んで兵庫港(現神戸港)に入港している(『兵庫北関入船納帳』)。莊園としては応長元年(1311)12月15日の善法寺尚清処分状写(「石清水文書」)に別相伝領として家嶋別符がみえる。長享2年(1488)には塩屋(現たつの市御津町)の保寿寺に家島から30束の柴年貢が毎日納められていたが、これは守護赤松氏の寄進によるものであった(『蔭涼軒日録』)。

江戸時代は姫路藩領で、郷帳類では家島一村として扱われる。初め宇佐崎組大庄屋の下に置かれたが、宝暦5年(1755)高島氏が大庄屋となった(『家島町誌』)。当村の本百姓の決定は石高所持によるものではなく、請林所持の有無によるという特色があった。請林は男鹿島・矢ノ島を除く29箇所にあったという。百姓はこれらの請林の柴茅を刈り取って売りさばき、その他の者は大坂方面へ出稼や奉公に出た。田畑が狭かったため漁業の占める割合が高く、釣漁・網漁などが中心であった。また大坂築城の切石をはじめ、石材の切出しも盛んであった。幕末の嘉永3年(1850)には、家島天神鼻に砲台場が築かれた。

明治8年(1875)飾東郡に移管され、同22年の町村制施行により家島村が成立。同29年飾磨郡の所属となり、昭和3年(1928)町制を施行した。平成18年3月27日姫路市に合併した。



家島諸島(北から)

家島町の文化財

①家島神社 家島諸島・播磨灘総鎮守。『続日本後記』承和7年(840)6月20日条に家嶋神を官社に列したとある。『延喜式』神明帳には揖保郡七座の一つで「家嶋神社名神大」として記されており、同書臨時祭の名神祭二八五座の中にも当社がみえる。境内入口の大鳥居の脇に万葉の歌碑がある。境内全域にはウバメガシ・シイ・トラベ等が生い茂り「天神の森」と呼ばれ、瀬戸内海国立公園に指定されている。平成13年に海岸線を中心とする境内整備の事業が行われ、天神鼻台場跡に大砲のモニュメント等が配された。毎年7月24・25日に天神祭り(夏祭り)が行われる。

②宮浦神社 宮地区の氏神で家島神社と関係が深い。かつては家島白髭大明神と称していたが、明治時代になって宮浦神社と改称された。社伝によれば比叡山実相院の覚円僧都が門徒と共に坊勢島に渡海し、或る夜霊夢によって故郷の琵琶湖に準え白髭大明神を勧請したという。以来この地を宮浦と称するようになったと伝える。境内にある元禄5年(1692)建立の鳥居は、以前は海中にあったともいわれ、近江の白髭神社(現滋賀県高島市)を想起させる。現社殿は、天明5年(1785)に建立されたものを昭和63年に改築したもの。境内に竈社と恵美酒社の小社がある。毎年7月24・25日に行われる天神祭りでは当社の火を戴いた上で提灯行列が行われ家島神社にその火を移すことによって祭りが始められる。

③赤坂清水(破風の井戸) 『播磨鑑』の「家島十景」の一つで法道仙人が来島して発見したと伝わる。名水として知られ、神事専用の取水口が設けられていた。傍らに数体の地蔵が祀られており、このうちの1体は宮浦神社にあったとも伝わる。

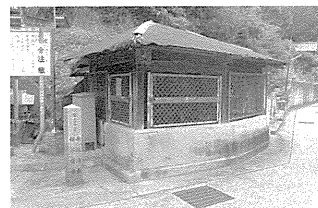
④真浦神社 真浦地区の中心に位置し、家島神社の摂社として祀られてきた。かつては荒神社と呼ばれていたが、明治時代になって真浦神社と改称された。家島神社の天神祭りで奉納される真浦の獅子舞(兵庫県指定無形民俗文化財)はこの地区で伝承されたもので、当社にも奉納される。現社殿は、弘化5年(1848)に建立されたものを平成16年に改築したもの。境内に恵美酒社と三社宮(神明社・金刀比羅宮・住吉社)があり、三社宮は播磨國総社の御分霊を勧請したもの。また、境外末社として海神社を祀り、近くには「どんがめっさん」⑤と呼ばれる磐座も祀る。



①家島神社



②宮浦神社



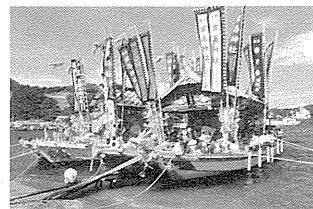
③赤坂清水(破風の井戸)



④真浦神社

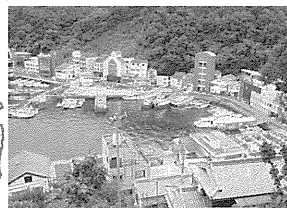


真浦の獅子舞 獅子舞の発生由来や成立年代は不明であるが、渡御船である壇尻船の額の裏に「干時文政三年(1820)庚辰六月吉日 願主宮方講中」と書かれていることから、この頃には行われていたと考えられている。獅子舞自体は御津町(現たつの市)の釜屋あたりから伝わってきたという。家島神社の天神祭りでは、獅子舞の一行は壇尻船と呼ばれる船に乗って、真浦から家島神社のある岬まで渡御するが、その道中、船の上に設えられた舞台の上で獅子を舞う。平成12年度に兵庫県の重要無形民俗文化財に指定された。



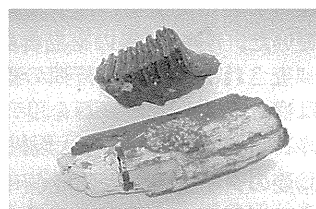
天神祭り

⑥城山公園 中世に山城(飯盛山の古城)が築かれていたとされ、「城山」と呼ばれる。城主は苦瓜助五郎本道と伝わるが、定かでない。城跡には太子堂が建つ。



⑥城山公園から真浦港を望む

⑦ナウマン象の化石 ナウマン象が生息していた更新世(約39～2万年前)は、氷河期で現在よりも海水面が最大で130mも低下し、瀬戸内海は陸地化しており、家島諸島は平地から突き出た山地であった。そのため、瀬戸内海の海底には更新世の化石を含む地層が分布し、漁の際に化石が網にかかることがある。写真はナウマン象の牙(一部)と臼歯(一部)の化石で、家島公民館に保管されている。



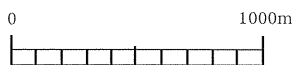
⑦ナウマン象の化石

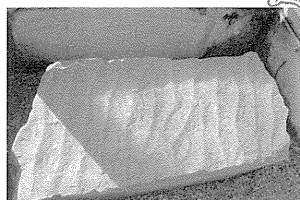
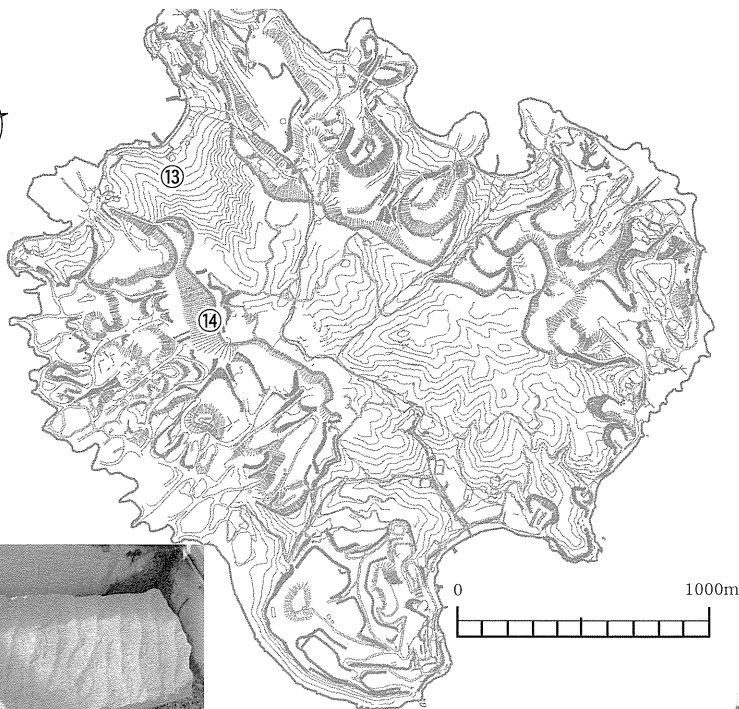
⑧チンカンドー古墳 宮港の奥深く湾入する入江東端(現在は入江は埋め立てられ相当短くなっている)の標高約40mの山腹部に南東方向に開口する横穴式石室が構築されている。封土や天井石等はすでに失われ、玄室の奥・側壁の下部が残存する。玄室の外に石棺が放置されていたが、平成17年度に玄室内に移動された。石棺は刳拔式家形石棺で蓋部に縄掛け突起が無く、古墳時代後期(6世紀初め～7世紀半ば頃)のものと考えられる。現状では周囲の樹根が石室の側壁を圧迫しており崩落の危険性もあるため、本格的な学術調査が待たれる。昭和48年に家島町(現姫路市)指定史跡となった。



⑧チンカンドー古墳

坊勢島





⑪連痕(波の化石)

男鹿島の文化財地図(S=1:30,000)
(姫路市の基本地形図を使用)

⑪連痕(波の化石) れんこん 家島諸島の地質は古い順に古生層、流紋岩類、花崗岩類、脈岩類の系統となっており、連痕は古生層に属す。下部は砂岩層、上部は砂岩・泥岩層が重なっており、かつて土砂が海底に堆積してできた珍しい波の化石である。昭和34年の家島群島総合学術調査によって坊勢中学校の東の海岸で発見された。その後、県道坊勢島線の建設工事の際に幾らかの小塊に分割され、その一つが坊勢中学校の校門脇のガラスケースに保管されている。

⑫マルトバ古墳群 西島の南側の東オドモやマルトバの浜には大小の礫石を盛って造られた多くの積石塚が所在することは古くから知られていた。昭和34年の家島群島総合学術調査団によってマルトバ古墳が調査され、古墳時代後期の群集墳であることが判明した。この築造には盛土を使わずに葺石を用いる点が珍しい。残念ながらここ30年余の碎石需要の増大に伴う大規模な土木工事により消滅した。

⑬菱のタイ古墳 大山北側の緩やかな標高26mほどの斜面に位置し南南西に開口する横穴式石室をもつ。昭和初期に石切場の石工によって発見されたとされ、昭和14年に兵庫県史蹟名勝天然記念物調査事務及び同嘱託の中野三令氏が確認した時点では、葡萄畑の開墾によって旧状が失われており、墳丘には出土した多くの石塊が投棄され、石棺は無く、祝部式土器(須恵器)が残るのみだったと報告している。昭和34年の家島群島総合学術調査で少量の須恵器片が出土した。現状では碎石業者の協力を得て、辛うじて消滅を免れているが、今後より一層の保護措置が望まれる。

⑭大山神社遺跡 大山の頂上部(標高220m)に位置する。昭和34年に第1・2次、平成元年から同5年まで併せて9次にわたる発掘調査が実施された。調査の結果、後期旧石器時代、縄文時代の石器類、弥生時代中期後半に属す高地性集落の竪穴住居跡・掘立柱建物等の遺構とそれに伴う遺物、平安時代後期から鎌倉時代の集落遺構及び遺物が出土した。出土品の一部が家島公民館に展示されている。

■編集 田藤 耕三(元坊勢小学校長)

⑨坊勢恵美酒神社 奈座港の地に鎮座し、海上安全・大漁満足の御神徳によって島民から信仰されている。現社殿は昭和53年に改築されたもの。境内地は昭和39年に掘割運河の掘削のため、若干縮小された。境内社として金刀比羅神社がある。なお、当社の海を隔てた南西に境外末社として海神社⑩が祀られており、地元では弁天島と称し神権伝説の島として漁師の信仰が篤い。



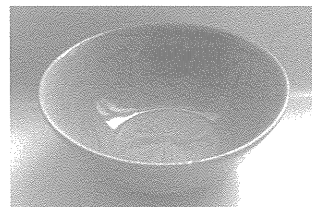
⑨坊勢恵美酒神社



⑫マルトバ古墳群
(昭和34年当時)



⑬菱のタイ古墳
(昭和34年当時)



⑭大山神社遺跡出土青磁碗